

日本ブロンテ協会 2014 年大会プログラム

日時 2014 年 10 月 18 日(土) 9 時 50 分から 17 時 30 分まで

場所 青山学院大学青山キャンパス 11 号館 1173 教室

(〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25)

★開会の辞 9 時 50 分  
 ★研究発表 10 時～12 時

総合司会 中京学院大学教授 松原典子  
 中央大学教授 大田美和

司会 大同大学教授 松井豊次

1. 「虚像が「語る」実像—Muriel Spark, *Emily Brontë: Her Life and Work*  
 が描く Emily Brontë」

フェリス女学院大学大学院博士後期課程 3 年 畑中杏美

2. 「『嵐が丘』と『本格小説』における追憶」

摂南大学准教授 皆本智美

司会 埼玉大学教授 宇田和子

3. 「書き手としての Jane Eyre」

日本大学准教授 兼中裕美

4. 「黒い柱と白い柱——『ジェイン・エア』と福音主義」

日本大学教授 田村真奈美

★総会 13 時 00 分～13 時 30 分

司会 事務局

★奨励賞表彰式

講評 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長

立正大学教授 白井義昭

★会長挨拶

会長 元近畿大学教授 清水伊津代

★新会長挨拶

新会長

★会場校挨拶

青山学院大学学長 仙波憲一

★大会委員長挨拶

青山学院大学教授 橋本清一

★講演 14 時 00 分～15 時 00 分

司会 京都大学大学院教授 廣野由美子

「シャーロット・ブロンテの風景」

立正大学教授 白井義昭

★シンポジウム 15 時 10 分～17 時 20 分

「ブロンテ姉妹を語る——オースティン、ギャスケル、G・エリオットとの関連で」

司会・発題者 東北大学名誉教授 鈴木美津子

発題者 和洋女子大学名誉教授 植松みどり

発題者 元川村学園女子大学教授 田中淑子

★閉会の辞 17 時 20 分

東京大学名誉教授 海老根宏

★懇親会 18 時 00 分～20 時 30 分

於 アイビーホール青学会館 3 階アロン

会費 6,000 円

司会 青山学院大学教授 緒方孝文

## 研究発表

### 1. 虚像が「語る」実像—Muriel Spark, *Emily Brontë: Her Life and Work* が描く Emily Brontë

フェリス女学院大学人文科学研究科博士後期課程3年 畑中杏美

小説家 Muriel Spark は、小説家としてデビューするより前に、評論家・批評家として *Emily Brontë* の伝記的批評 *Emily Brontë: Her Life and Work* (1953) を Derek Stanford との共著で出版している。この伝記は、伝説的なエピソードや虚構性を排除して Emily の実像に迫るということを目的とはしていない。Spark はむしろ、作者の人生を物語る伝記というジャンルの虚構性を意識し、虚像を通して見えてくる実像を探ろうとしているのである。本発表では、上述の伝記とともに、Spark 編纂の書簡集 *The Brontë Letters* (1954) もあわせて、Spark がどのような Emily 像に光を当てようとしたのかを示すとともに、小説家デビューの直前に伝記執筆を試みた意義を明らかにしたい。

### 2. 『嵐が丘』と『本格小説』における追憶

摂南大学准教授 皆本智美

『本格小説』の作者である水村美苗は、この小説を執筆する前から『嵐が丘』をモデルに書こうと決めていたという。前者が後者をモデルにしていることは、登場人物の造型、数世代にわたるストーリー展開、枠構造を有する語り等の共通点が観察されることから明らかであるが、同時に両作品には相違点もまた数多く見られる。そもそも 19 世紀英国ヨークシャーから時代も場所も大きく隔たった戦後日本に舞台を設定している『本格小説』が『嵐が丘』と異なる点を多く有していることは当然であるが、そのような大きな差異があるにもかかわらず、両作品には奇妙にも類似した読後感が漂う。本発表では、両者の共通点と相違点を探りながら『本格小説』の特徴について考察していきたい。

### 3. 書き手としての Jane Eyre

日本大学准教授 兼中裕美

*Jane Eyre* は、主人公 Jane の一人称語りの自伝であり、Jane は何度も読者に呼びかけ、語り手としての姿が顕著である。一方、書き手としての Jane は、小説の初版に“edited by Currer Bell”とあり、第二版では作者としての Currer Bell による序文が付けられ、後にそれが Charlotte の筆名であると暴露されることも関連して、読者は実作者の Charlotte に注目し、小説の世界での書き手は語り手の Jane であるという意識が薄れるように思われる。

本発表では、自伝の書き手としての Jane に焦点を当て、その存在意義を探求してみたい。

### 4. 黒い柱と白い柱——『ジェイン・エア』と福音主義

日本大学教授 田村真奈美

『ジェイン・エア』には二人の国教会福音派の聖職者、ブロックルハーストとセント・ジョン・リヴァーズが登場する。二人は一見対照的なようである（一方は「黒」、もう一方は「白」のイメージで語られる）、実は共通点も多く（例えば、二人とも威圧するような背の高さが強調される）、それぞれがジェインの精神的な成長の過程において重要な役割を果たす。福音派の信仰を持つということがこの二人については決定的に重要なのだが、そのことがこの小説全体にとってどのような意味を持っているのだろうか。ブロックルハーストとセント・ジョン・リヴァーズの描写を中心に『ジェイン・エア』と福音主義について、作者の福音主義信仰との関わりも踏まえて考えてみたい。

## シンポジウム 「ブロンテ姉妹を語る

### —オースティン、ギャスケル、G・エリオットとの関連で—

今回のシンポジウムは鼎談形式をとっております。文学、結婚、宗教、作家を取り巻く社会状況などにかんして講師同士がざっくばらんに対話しながら、ときにはフロアの皆様からの応援を受けながら、進めていきたいと思っております。ブロンテ姉妹とそれぞれの作家を比較検討することにより、ブロンテ作品の特徴が浮き彫りになることを期待しております。フロアからの活発なご発言を歓迎いたします。

#### 「オースティンとブロンテ姉妹—ゴシック小説の系譜」

元川村学園女子大学教授 田中 淑子

ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテにおいては、小説家としてのスタートにゴシック小説が大きく関わっている。18世紀後半に600冊ものゴシック小説が出版され、多くは女性作家の手によるものであった。しかし、オースティンは、女性作家の登場の機運に乗りながら、ゴシック小説に見られる「真実らしくない仕掛け」と「誇張」を揶揄し、「普通の生活を芸術」することを宣言し、ゴシック小説の息の根を止めた。しかし、ゴシックの水脈は地下に潜りながら、シャーロットの作品に再び噴出する。彼女にとって、ゴシック的恐怖は精神活動を誘発するばかりか、現実を反逆し、心の闇の深淵を覗かせるには魅惑的な仕掛けであった。しかし、ロマン主義的高揚がオースティンには欠落していると批判した彼女の葛藤は、作品をリアリズムの軌道から脱輪させないことにあった。『ジェイン・エア』のバーサ・メイスンと『ヴィレット』の修道女の幽霊に、恐怖の変化の軌跡を辿る。

#### 「英国国教会の牧師の娘ブロンテとユニテリアン派の牧師の妻ギャスケル」

司会 東北大学名誉教授 鈴木美津子

周知のように、シャーロット・ブロンテは英国国教会の牧師の娘であり、後には牧師の妻となった。エリザベス・ギャスケルの父ウィリアム・ステューブンソンは、若い頃非英国国教のユニテリアン派の牧師をしていたことがあり、夫のウィリアム・ギャスケルもユニテリアン派の牧師であった。父と夫が聖職者であった二人の女性作家の宗教的な信条は作品にどのように反映されているのか。シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』(1853)とエリザベス・ギャスケルの『北と南』(1855)を取り上げて、検証してみたい。

#### 「19世紀の現実——結婚とそのあと」

和洋女子大学名誉教授 植松みどり

小説家の義務とはなんだろうか。「叡智に裏打ちされた言語意識」、「同時代の社会に対する問題提起」、そして「人類の根本問題への鋭い言及」をまず挙げてみたい。言い古されたことかもしれないが、19世紀の英国小説のヒロインたちにとって最終目標、幸せの実現、物語の結末は「結婚」であった。だが、そのあとの現実が、作品の中に描かれていないわけではない。ジョージ・エリオットの『牧師館生活の物語』、『ミドルマーチ』に描かれた結婚とそのあとの現実を、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』、アン・ブロンテの『ワイルドフェル館の住人』と比べる。当時の婚姻関係の法制定の動きなどに関連させることで、各小説家の現実社会との関わりの特徴を見て、その役割を考えてみたい。